

2012年 11月 1日 Vol.0070

検察が「けもの道」に迷いこんでいる ①

EPUB版：<http://foomii.com/00027-12676.epub>

■検察の現職幹部として裏ガネ問題を告発

「検察の正義」が揺らいでいる。

鈴木宗男事件、日歯連（日本歯科医師連盟）ヤミ献金事件、朝鮮総連ビル詐欺事件、小沢一郎事件厚生労働省・村木厚子事件……。21世紀に入ってから10年、なぜに検察は不可解な立件を次々と連発しているのだろうか。いつから検察は、こんな乱暴な組織に変質してしまったのだろうか。

2002年4月22日、私は現職の大阪高検公安部長でありながら、でっち上げの事件によって逮捕された。なぜ私が検察から狙われたのか。それは「裏ガネ」という検察の最大のタブーに触れたからだ。

検察には、「調査活動費」という名目の不明朗なカネがある。その名の通り、検察の調査活動のために自由に使える予算だ。だが実際には、調査活動費は実にデタラメな使われ方をしていた。架空の領収書を大量に発行し、調査活動費として適正に使っていた体裁を取る。そして、宙に浮いた裏ガネは幹部たちが自分のポケットに入れてしまう。

そんなとんでもない裏ガネづくりを、検察は組織的に行ってきた。恥ずかしながら私も検察官時代、そうした組織的犯罪に手を染めてきた一人だ。検察は、当時年間約6億円の調査活動費を使っていたが（この問題が露呈した結果、現在約7500万円に激減した）、その多くが幹部たち、最高検検事総長、高検検事長、地方検察庁なら検事正、法務省なら事務次官、刑事局長、官房長の裏金として流用されてきた。一部の地検がやっているという小さな話ではない。全国津々浦々で検察の裏ガネ作りは行われてきた。

こんな不正をいつまでも許していいはずはない。私は大阪高検公安部長という要職にありながら、マスコミを通じて匿名で裏ガネ問題の告発を始めた。テレビ朝日の報道番組「ザ・スクープ」では実名告発をしようと準備を進めていた。その取材のアポイントを取っていたまさに当日、私は不当にも逮捕されてしまったのだ。

これはまさに、裏ガネ問題告発を止めさせるための口封じだった。

■カミソリ後藤田との間で行われた「けもの道」の取引

最初に言っておかねばならない。

私の裏ガネ告発は、当初は不当な人事に抗するための「私憤」が動機だった。だが、それはすぐに「公憤」へと変わった。国民の税金を幹部の遊興費に使うような組織がどうして「正義の機関」などと言えよう。腐りきった組織の身勝手な論理を打破するため、裏ガネ作りという犯罪を世に伝えようと誓った。

当初私は、「四国タイムズ」というローカルメディアを通じて裏ガネ問題を匿名告発していた。ターゲットに据えたのは、大阪地検の加納駿亮・検事正（肩書は当時。とくにことわりがない場合、以下同）だ。加納氏は関西検察のエースであり、いずれ検事長に昇進するとの呼び声が高い人物だった。

私と加納氏の確執は、ひよんなことから生まれた。加納氏が統括責任をしていたある収賄事件で、彼の強引な捜査のやり方を私が咎めた。これがプライドの高い加納氏を刺激してしまい、その後、私に対して人事や給与での意趣返しが繰り返されるようになったのだ。それはもはや人事権の濫用としか思えない冷遇ぶりだった。

大阪高検公安部長は法務省でいう「2号職」に当たるはずなのに、加納氏は「3号職」という1ランク低い待遇で取り扱った。不当に人事権を振りかざすやり方に我慢がならず、私は加納氏を狙いに定め、検察の組織的な裏ガネ作りを最高検察庁に匿名で告発したのだ。ここまでの経緯は、まさに私一人の私憤がもとになって行われた。

だが事態は予想外の方向に進んだ。2001年11月、当時の原田明夫・検事総長は早々に「嫌疑なし」と結論付け、裏ガネ問題に蓋をしたのだ。裏ガネの原資は100%国民の税金である。「正義の機関」であるはずの検察が、自己保身のために犯罪を隠蔽する——私の怒りが義憤に変わった瞬間だった。匿名ではなく、実名でメディアに出て組織的な裏ガネ作りを告発しようと腹に決めた。

加納氏が関与した裏ガネ問題を告発したことによって彼の検事長昇進にストップがかかった。法務省としては次期高松高検検事長に加納氏を推薦していた。だが彼が告発されていたことが途中で法務省内で知られることとなり、法務大臣はその人事を保留扱いにする。結局1期下の宗像紀夫・最高検刑事部長が高松高検検事長に就任している。

「裏ガネ問題を刑事告発されたせいで、加納氏が検事長になれる可能性はなくなった」

検察内部ではそんなうわさが流れていたものだ。さらに私の存在が組織の「鬼っ子」になりつつあった。

これ以上、検察の裏ガネ問題を表に出してはならない。そんなことになれば、加納氏に限らず被害はさらに拡大する。検事総長以下、少なくとも70人の検事が懲戒免職を食らう。使い込んだ巨額の裏ガネは、国庫に返還しなければならない。

現職の検事にとどまらず、被害は検察OBにも当然及ぶ。検察崩壊を食い止めるため、何とか三井環の暴走を止めなければならない……。

当時の原田明夫検事総長は松尾邦弘・法務事務次官、吉田佑紀・法務省刑事局長を伴い、自民党の重鎮のもとを訪ねた。故・後藤田正晴・元法務大臣だ。検察首脳たちは

「このままでは検察がつぶれてしまいます」

そんな泣きを入れたのだ。

話を受けた後藤田氏は小泉純一郎内閣へ働きかけ、保留状態にされていた

検事長人事を動かした。「検事長の芽はもうない」と噂されていた加納氏は 2001 年 11 月 15 日付で福岡高検検事長に昇進した。

(続く)

著者：三井環（元大阪高検公安部長）